

○第40回（平成26年1月15日）評価委員会評価

今年度の連携排砂・通砂は、6月19日から6月22日にかけて連携排砂、8月23日から8月25日にかけて連携通砂、8月30日から31日にかけて細砂通過放流が実施された。

出し平ダムからの排砂量は、目標排砂量約14万 m^3 に対し、約18万 m^3 となり、排砂前に設けた想定変動範囲の約7万 m^3 から約31万 m^3 の内に収まる結果となった。

水質、底質および生物相の環境調査結果をみる限り、連携排砂および連携通砂による一時的な環境の変化はあるものの、大きな影響を及ぼしたとは考えられない。細砂通過放流においては、濁度の状況から通常の出洪水と同程度であったと考えられる。

今回の連携排砂・連携通砂・細砂通過放流における実施経過及び環境調査結果から以下の知見が得られた。

◇連携通砂について

連携通砂時において、通砂後の測量結果によると、排砂後から約12万 m^3 の土砂が出し平ダムに堆積したものと考えられる。

◇細砂通過放流について

- ・細砂通過放流の実施により、短時間集中豪雨に対する対策を実施できなかった平成20年に比べて9月調査時のCODや強熱減量等の上昇が抑制されるなど、底質変質抑制の傾向がみられた。
- ・再現シミュレーションは、環境調査結果から、放流SS濃度、水温が概ね表現できていた。

◇水質調査について

湛水池では、

- ・過去の測定値の範囲内であった。

河川では、

- ・通砂時における一部の地点で既往の測定値を上回った箇所があったが、これは集中豪雨により出し平ダム上流域の河道や溪谷からの土砂流入が例年に比べ多かったことによるものと考えられる。

海域では、

- ・代表4地点（C点、A点、河口沖、生地鼻）において概ね過去の測定値の範囲内であった。

◇底質調査について

湛水池では、

- ・連携排砂および連携通砂1日後のCOD、全窒素および硫化物は、5月と9月の調査時に比べ概ね低かった。また、ORP（酸化還元電位）は高く、50%粒径の値はやや大きくなり、連携排砂および連携通砂の効果がみられた。

河川では、

- ・5月および9月における各調査地点の調査結果は大きな変動がなく、連携排砂・連携通砂・細砂通過放流の影響はほとんど認められなかった。

海域では、

- ・全リンについて、一部の地点で5月、排砂1日後、通砂1日後において、既往の測定値を上回った箇所があったが、9月時点において概ね過去の変動範囲内であった。
- ・その他の項目において、5月、排砂1日後、通砂1日後および9月における各調査地点の調査結果は、一部の地点でCOD・全窒素・硫化物など既往の測定結果を上回っており、今後も注視する必要がある。

◇水生生物調査について

- ・アユの肥満度について、出・洪水時において一時的に影響を受けるものの、その後は回復していることが確認できた。また、常願寺川においても同様の結果となった。
- ・付着藻類について、優占種が珪藻類から藍藻類へ変化している傾向が見受けられる。類似河川の常願寺川の傾向もあわせて注視する必要がある。

◇今後の留意点

- ・連携排砂、連携通砂及び細砂通過放流の実施については、今回の審議内容を踏まえ、次年度の排砂計画に反映させること。